

福岡大学病院救命救急センターに搬送された自殺企図者の実態

平成14年度～平成17年度の調査

衛藤 暢明¹⁾ 岩永 亜樹¹⁾ 浦島 創¹⁾
喜多村泰輔²⁾ 田中 経一²⁾ 西村 良二¹⁾

1) 福岡大学医学部精神医学教室

2) 福岡大学医学部救命救急医学教室

要旨：福岡大学病院救命救急センターは三次救急を担う施設であり、毎年多くの自殺企図患者が入院している。今回、われわれは救命救急センターの入院抄録をもとに、平成14年度から平成17年度までの期間において自殺企図後に搬送された患者を対象として後ろ向き調査を行った。これらの患者の年齢、性別、入院の日時、自殺企図の手段、転帰、精神科受診歴の有無、入院中の精神科受診依頼（コンサルテーション）の有無、精神医学的診断を調べた。この期間内に搬送された自殺企図患者は301人であり、自殺企図者全体の年齢別の内訳では20歳代が最も多く、男女比はほぼ1:1であった。しかし、既遂者（81人）についてみると、男性が圧倒的に多く、男性が女性の2倍以上を占め、特に中高年（30～50歳代）の男性が目立っていた。これに対し、未遂者（220人）では20歳代が中心であり、女性が男性よりも約30%多かった。自殺企図者全体において、自殺企図の手段について見ると、薬物使用および中毒（52%）が最も多く、飛び降り（20%）、縊首（16%）、刺器・刃器の使用（10%）がこれに続いた。入院の日時について見ると、曜日別では月曜日が最も多く、月別では、1月、2月、8月、10月が多かった。平成14年度から平成17年度までの期間において、年度ごとの未遂者に対する精神科受診依頼の割合は増加していた。自殺未遂者では、自殺企図以前に精神科受診歴がある患者の80%、また救命救急センター入院中に精神科受診依頼のあった84%が退院直後の継続治療につながっていた。今後、可能な限り救命救急センター入院中に精神科的評価を実施することにより、自殺企図後の精神科的治療がより多くの患者で継続できるものと考えられた。

キーワード：自殺企図、救命救急センター、コンサルテーション、精神科的治療、自殺予防